

II Samuel 10:1-19, 11:1-27

ダビデ、アモンとシリヤ(アラム)に対して戦争をする

(II サムエル記10:1-3)「この後、アモン人の王が死に、その子ハヌンが代わって王となった。ダビデは、「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたように」と考えた。そこで、ダビデは家来を派遣して、彼の父の悔やみを言わせた。ダビデの家来たちがアモン人の地に来たとき、アモン人のつかさたちは、彼らの主君ハヌンに言った。『ダビデがあなたのもとに悔やみの使者をよこしたからといって、彼が父君を敬っているとでもお考えですか。この町を調べ、探り、くつがえすために、ダビデはあなたのところに家来をよこしたのではありませんか。』」

ご覧のとおり、この人々はダビデをまったく信頼していません。彼らは、ダビデが自分たちを攻撃しようとしていると信じていました。ダビデの親愛の情は、完全に誤解されてしまいました。

(II サムエル記10:4)「そこでハヌンはダビデの家来たちを捕らえ、彼らのひげを半分そり落とし、その衣を半分に切って尻のあたりまでにし、彼らを送り返した。」

これは、まったくの屈辱でした！これ以上完全にダビデの使者たちに恥をかかせる方法を思いつくことはできません。ダビデは、好意と平和を示そうとして使者を送ったのに対して、これは、戦争をしかけようというハヌンの挑戦だったと信じている解説者たちもいます。

(II サムエル記10:5-6)「ダビデにこのことが知らされたので、彼は彼らを迎えに人をやった。この人たちが非常に恥じていたからである。王は言った。『あなたがたのひげが伸びるまで、エリコにとどまり、それから帰りなさい。』アモン人は、自分たちがダビデに憎まれるようになったのを見て取った。そこでアモン人は使いをやって、ベテ・レホブのアラムとツォバのアラムの歩兵二万、マアカの王の兵士一千、トブの兵士一万二千を雇った。」

アモン人たちは、自分たちがダビデに憎まれるようになったのを見て、戦争の準備をします。I 歴代誌19:6-7によれば、彼らはかなりの金額を出してシリヤから傭兵を雇います。(I 歴代誌19:6-7参照)

(I 歴代誌19:6-7)「アモン人は、自分たちがダビデの憎しみを買ったのを見て取った。そこでハヌンおよびアモン人は、銀一千タラントを送って、アラム・ナハライムとアラム・マアカとツォバとから戦車と騎兵を雇った。彼らは自分たちのもとに、戦車三万二千台とマアカの王とその軍勢を雇った。彼らは出て来て、メデバの前に陣を敷いた。アモン人も、彼らの町々から集まり、いくさに臨もうと出て来た。」

(II サムエル記10:7-10)「ダビデはこれを聞き、ヨアブと勇士たちの全軍を送った。アモン人は出て、門の入口に戦いの備えをした。ツォバとレホブのアラムおよびトブとマアカの人たちは、別に野にいた。ヨアブは、彼の前とうしろに戦いの前面があるのを見て、イスラエルの精鋭全員からさらに兵を選び、アラムに立ち向かう陣ぞなえをし、民の残りの者は彼の兄弟アブシャイの手に託して、アモン人に立ち向かう陣ぞなえをした。」

このときまでには、イスラエル人たちは戦いのベテランになっていました。見たところ、ヨアブは精鋭の兵を選んで、接近してくるシリヤ人(アラム)傭兵とアモン人の軍隊の間に置き、このふたつの軍が一緒になることを防ぎました。

(II サムエル記10:18-19)「アラムがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはアラムの戦車兵七百と騎兵四万をほふり、將軍ショバクを打って、その場で殺した。ハダデエゼルに仕えていた王たちはみな、自分たちがイスラエルに打ち負かされたのを見て、イスラエルと和を講じ、彼らのしもべとなった。アラムは恐れて、それからはもう、アモン人を救おうとはしなかった。」

イスラエルのすばらしい勝利でした。この戦いで、ダビデは疑いもなく当時の偉大な支配者としての地位を確立しました。

テーマ:ダビデのふたつの大きな罪。

さて、II サムエル記の二部であり、最後の部分に入ります。私はここを「ダビデのトラブル」と名づけました。最初の部分では、私たちは「ダビデの勝利」を見てきました。神さまの恵みのもとで、ダビデは世界の偉大な王のひとりになりました。ところが、この章に記録されている罪によって、ダビデは神さまの“さばき”のもとにおかれます。これ以降、ダビデにはトラブルが起こります。彼の人生は心痛の連続になります。

この罪は、神さまの敵が今日に至るまで神さまを冒瀆する原因となりました。彼らは思わぬせぶりに「これが、『神さまの心になかった者』だって！」と声を大にするのです。

このダビデの罪は、一面の雪の中にいるタールだらけの赤ん坊のように、またクリームの入ったボウルの中に黒い木苺が入っているように目立ちます。そのせいで、私たちは彼の偉大さを見過ごしてしまうかも知れません。罪は、ダビデの生涯の例外であって、パターンではないことを思い出してください。

神さまのみことばは、ダビデの罪につけこむようなことはしません。また、彼の失策を取り繕うこともしません。神さまは、これは罪ではない、とは言われません。神さまはこれを罪と呼ばれ、ダビデはそのために罰を受けます。

(II サムエル記11:1)「年が改まり、王たちが出陣するころ、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。彼らはアモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。」

それは、王たちが戦いに出陣するころのことでした。言い換えれば、この当時国々は、今日鳥や動物に“解禁期間”があるように、お互いに対してそのような期間をもうけていました。解禁のときには、彼らを打ってよいのです。でも、ほかのときには打つことはできませんでした。でも、結局のところ、現代の戦争でも同じことではないでしょうか？ベトナムのモンスーンの季節には、戦争は休止になります。なぜなら、彼らは沼地で動きがとれなくなり、雨で飛行機は飛べなくなるからです。モンスーンが緩和すると、再び戦争が始まります。ダビデの時代の戦争に対するアプローチは、私たちが考えているよりも数段現代的だったかもしれません。

ふたつの世界大戦について不幸だったことは、最も大きな苦しみは敵ではなく、冬の天候によって引き起こされたということです。それでも彼らは戦い続けようとしたのです。少なくとも、ダビデの時代には、戦いの季節というものがありました。彼らのほうが私たちよりも少し文明化されていたかもしれません。少なくとも、彼らは比較的平和なときを楽しむことを認めていました。

さて、アモンの子らと戦わせるために、ダビデはヨアブと軍隊を送り出しました。ダビデは彼らと一緒に行きませんでした。その代わりにダビデはエルサレムで待っていました。ダビデらしくありませんでした。なぜ彼はとどまったのでしょうか？私は提案しかできません。ダビデが城を建てたあと、彼は城がとても居心地が良いことに気づきました。若い頃を過ごしたアドラムのほら穴とは、たいそう違っていました。彼の城は、豪奢で居心地の良い城でした。同時にダビデはシオン山を愛していて、その場所の近くにいたかったのです。

繁栄はあまりにも多くの人々を罫にかけてきたもののひとつです。すばらしい快適さが、私たちの国の中でののろいになってきました。ダビデはエルサレムにとどまりました。それがそもそも間違いでした。ダビデも部下たちと一緒に戦争に行くべきだったのです。

(II サムエル記11:2)「ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。」

この当時、人々は夕暮れ時を屋根の上で過ごしました。家には表のポーチも、裏の中庭もありませんでした。今日でさえも、古い正義の町(エルサレム)はとてもしつこく詰まっており、平らな屋根の上に家族が集まります。ダビデは城の屋根の上に上がって、見たところちょっと神経質そうに行ったり来たりしていました。きっと彼の頭の中には、多くの問題があったのでしょう。自分の部下たちは戦地で戦っています。自分は戦いに行かなかったということが、彼の良心をとがめていたのかも知れません。歩きながら、彼はあたりを見回し、この女性が自分の家の屋根の上で水浴びをしているのを見ました。これはダビデの罪ではありませんでした。神さまはダビデに罪を負わせられましたが、バテシェバもその罪の一因となったように思われます。彼女はもう少し慎み深くすることもできたはずでした。

礼儀作法にうるさい人、と思われる危険を冒して言いますが、私たちは、女性たちの服装が男性の大きな誘惑になるような時代に生きています。彼女たちが特定の洋服を着るときに、クリスチャンの女性たちも含めてどれくらい多くの女性たちが、自分が何をしているか分かっているかな、と思いますね。私は多くの教会の礼拝に出席して来ました。そこでは教会の独唱者が舞台上に上がって独唱し、私たちを天国の門にまで連れて行ってくれます。そのあと、その女性が席について、地獄の門まで連れて行くのを見てきました。(訳注: 座ってからの態度が悪い、ということでしょうか?) 私は、この女性バテシェバも部分的に罪があると思います。彼女は、公共の場で水浴びをするとは、何ということをしていたのでしょうか? 「公共の場」という意味は、たしかにダビデは自分の城から彼女を見ることができたということです。もしかしたら、彼女はダビデが自分を見る可能性があるかもしれないと思って、わざわざ屋根の上で水浴びをしていたのではないかなあ、と思います。

(II サムエル記11:3)「ダビデは人をやって、その女について調べたところ、『あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘バテ・シェバではありませんか』との報告を受けた。」
実際、ウリヤは外国人でした。

(II サムエル記11:4)「ダビデは使いの者をやって、その女を召し入れた。女が彼のところに来たので、彼はその女と寝た。——その女は月のものの汚れをきよめていた——それから女は自分の家へ帰った。」
これは、醜い物語です。明白で単純なことばで書かれていますから、私たちはそのポイントを見過ごすことはできません。もしダビデが部下たちとともに戦場に行っていたなら、このようなことは起こらなかったのです。また、もしバテシェバが家の中で水浴びをしていたなら、このようなことは起こらなかったのです。

(II サムエル記11:5)「女はみごもったので、ダビデに人をやって、告げて言った。『私はみごもりました。』」
ダビデには、深刻な問題ができました。どうするのでしょうか? バテシェバの夫ウリヤは、ダビデの勇士のひとりです。彼はダビデの忠実な部下のひとりなのです。

(II サムエル記11:6-7)「ダビデはヨアブのところへ人をやって、『ヘテ人ウリヤを私のところへ送れ』と言わせた。それでヨアブはウリヤをダビデのところへ送った。ウリヤが彼のところに入ると、ダビデは、ヨアブは無事であるか、兵士たちも変わりないか、戦いもうまくいっているか、と尋ねた。」
ダビデは、戦いがどうなっているか知るためにウリヤを戦争から連れ戻したふりをしました。

(II サムエル記11:8)「それからダビデはウリヤに言った。『家に帰って、あなたの足を洗いなさい。』ウリヤが王宮から出て行くと、王からの贈り物が彼のあとに続いた。」
ダビデは、この場合、自分の罪責感を取り除こうとしてできる限りのことをしています。

(II サムエル記11:9)「しかしウリヤは、王宮の門のあたりで、自分の主君の家来たちみなといっしょに眠り、自分の家には帰らなかった。」
ウリヤは王宮の門のあたりで眠りました。戦いのときに、この人は自分の家には帰ろうとしません。このことは本当にダビデを驚かせました。同時にウリヤが家に帰らなかったことは、自分の城で贅沢を楽しんでいたダビデに対する叱責でもありました。

(II サムエル記11:10)「ダビデは、ウリヤが自分の家には帰らなかった、という知らせを聞いて、ウリヤに言った。『あなたは遠征して来たのではないか。なぜ、自分の家に帰らなかったのか。』」
ご覧のとおりダビデは、自分が妊娠の責任を問われないような立場へウリヤを置こうとしているのです。

(II サムエル記11:11)「ウリヤはダビデに言った。『神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私だけが家に帰り、飲み食いして、妻と寝ることができましょうか。あなたの前に、あなたのたましいの前に誓います。私は決してそのようなことをいたしません。』」

ウリヤは偉大な人物でした。彼は外国人ではありませんでしたが、イスラエルに対して忠実でした。そのことは、ダビデの二重の罪をさらに重いものにしました。ウリヤは言いました。「軍隊も、私の司令官も戦場の危険の中にいるのです。私は家に帰って贅沢と快適さを楽しむわけにはいきません。」

(II サムエル記11:12-13)「ダビデはウリヤに言った。『では、きょうもここにとどまるがよい。あすになったらあなたを送り出そう。』それでウリヤはその日と翌日エルサレムにとどまることになった。ダビデは彼を招いて、自分の前で食べたり飲んだりさせ、彼を酔わせた。夕方、ウリヤは出て行って、自分の主君の家来たちといっしょに自分の寝床で寝た。そして自分の家には行かなかった。」

今、ダビデはウリヤを家に帰らせるために、他のトリックを試みます。ダビデはウリヤを酔っ払わせるのです！それでもこの人は家には帰りませんでした。

(II サムエル記11:14-15)「朝になって、ダビデはヨアブに手紙を書き、ウリヤに持たせた。その手紙にはこう書かれてあった。『ウリヤを激戦の真っ正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が打たれて死ぬようにせよ。』」

私の判断では、これが彼の罪の最悪の部分です。ダビデはわざわざウリヤの殺人を企んだのです。これには言い訳はできません。神さまのみことばは、ダビデがしたことを記録しています。神さまはこのことを隠したりなさいませんでした。このことを公に持ち出されたのです。これは事実です。ダビデは有罪です。

(II サムエル記11:16-17)「ヨアブは町を見張っていたので、その町の力ある者たちがいると知っていた場所に、ウリヤを配置した。その町の者が出て来てヨアブと戦ったとき、民のうちダビデの家来たちが倒れ、ヘテ人ウリヤも戦死した。」

血が凍ると思いませんか？（ぞっとしませんか？）

(II サムエル記11:18-20)「そこでヨアブは、使いを送って戦いの一部始終をダビデに報告するとき、使者に命じて言った。『戦いの一部始終を王に報告し終わったとき、もし王が怒りを発して、おまえに「なぜ、あなたがたはそんなに町に近づいて戦ったのか。城壁の上から彼らが射かけてくるのを知らなかったのか。』」

ダビデの反応に関するヨアブの予想は、使者からのメッセージの本当の意義を隠すための隠蔽工作だったかもしれません。

(II サムエル記11:21-25)「『エルベシエテの子アビメレクを打ち殺したのはだれであったか。ひとりの女が城壁の上からひき臼の上石を投げつけて、テベツで彼を殺したのではなかったか。なぜ、そんなに城壁に近づいたのか』と言われたら、「あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました」と言いなさい。』こうして使者は出かけ、ダビデのところに来て、ヨアブの伝言をすべて伝えた。使者はダビデに言った。『敵は私たちより優勢で、私たちに向かって野に出て来ましたが、私たちは門の入口まで彼らを攻めて行きました。すると城壁の上から射手たちが、あなたの家来たちに矢を射かけ、王の家来たちが死に、あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました。』ダビデは使者に言った。『あなたはヨアブにこう言わなければならない。「このことで心配するな。剣はこちらの者も、あちらの者も滅ぼすものだ。あなたは町をいっそう激しく攻撃して、それを全滅せよ。」あなたは、彼を力づけなさい。』」

これはダビデから出てきたとても敬虔なことばです。ダビデを恥ずかしいと思いませんか？彼は本当の罪人です。彼はとんでもないことをしたのです。彼をどうしたらよいでしょう？神さまがこれから彼を罰せられることを見て行きます。

(II サムエル記11:26-27)「ウリヤの妻は、夫ウリヤが死んだことを聞いて、夫のためにいたみ悲しんだ。喪が明けると、ダビデは人を作り、彼女を自分の家に迎え入れた。彼女は彼の妻となり、男の子を産んだ。しかし、ダビデの行ったことは【主】のみこころをそこなった。」

「しかし、ダビデの行ったことは【主】のみこころをそこなった。」

そのことを見過ごさないでください。ダビデは自分の罪を上手くやりおおせることはありませんでした。生涯のこの時点までは、ダビデは多くの勝利を治めました。でも、今から先、死ぬまで、彼はトラブルに会うのです。

申し上げます。あなたも罪を犯す可能性があるのです。誰かが私に、
「クリスチャンが酔っ払うことができますか？」

と訊ねました。私は答えました。

「確かに、クリスチャンも酔っ払うことができます。」

この人はショックを受けました。でもそのあと、彼は訊ねました。

「上手くやりおおせることはできますか？」

これが厄介なところですよ。この世の人は、上手くやりおおせることができます。主は悪魔の子らをむち打たれることはありません。でも確かに主は、ご自分の子らをまき小屋に連れて行かれます。(訳注:しかるために庭の隅のまき小屋に子どもを連れて行く、ということのようです。)あなたは、自分のまき小屋に連れて行かれた人物のアドバイスを聞きますか？私は、クリスチャンが罪を犯しておいて上手くやりおおせることができないことを、知っています。ダビデは上手くやりおおせることはありませんでした。ダビデの行ったことは主のみこころをそこなったのです。何かが主のみこころをそこなうとき、主はそのことを何とかなさるのです。

ほんの少し、事実を知っている人はいましたが、ダビデは自分の罪を上手くやりおおせたと思いました。ダビデの司令官のヨアブは事実を知っていました。バテシェバを城に連れて来た、ダビデにごく近い、エルサレムの相談役のうちの何人かは事実を知っていました。それ以外には誰も知りません。そしてこの人々の口は堅く閉じられていました。彼らはあえてこのことを話すようなことはしません。でも、ダビデは自分の王座に座って、まわりを見回して(誰か知っているのではないかと)怪しみます。ダビデの城には、おそらく彼の周りに200人くらいの人々がいたことでしょう。そして疑いもなく、かれはひとりひとりの顔を覗き込んで、無言で自問したことでしょ。

“彼らは知っているだろうか？”

と。しばらくすると、ダビデはおそらく満足して深々と椅子にもたれ、独り言をいったことでしょう。

“いやあ、上手くやりおおせたな。誰も知りはないぞ。”

それがエルサレムで知られていようといまいと、ダビデの秘密の罪、そして私たちの秘密の罪は神さまの前に明らかです。だれかが、このように言いました。

「地上での秘密の罪は、天国では公のスキャンダルである。」

神さまは私たちのすることをすべてご存知なのです。